



オペラへの招待

ヴェルディ作曲 歌劇『ファルスタッフ』 7月15日(金)・16日(土)
17日(日)・18日(月・祝)

演奏と演出の見事なコンビネーションが ヴェルディの晩年の作品の魅力伝える



初日と3日目のファルスタッフ役を演じた平 欣史(右)と4日間全てのフォード役を務めた市川敏雅



青山 貴は2日目と4日目のファルスタッフ役を演じ、圧倒的な歌唱で聴衆を魅了した。右はアリーチェ役の山岸裕梨

〈オペラへの招待〉は、“初めてのオペラ”を体験するのについてつけのシリーズとして定着しています。

今回は、“オペラ王”と呼ばれるイタリアの作曲家ヴェルディの最後の作品でかつ最高傑作の呼び声の高い『ファルスタッフ』を上演しました。

指揮はイタリアの劇場で経験を積み、現在、日本のイタリア・オペラ上演において最も評価の高い園田隆一郎。同じくイタリアを中心に活動している田口道子が演出。田口の演出は、読み替えてではなく、アッリーゴ・ボーイトの台本を深く読み込んだオーソドックスなものとなりました。

原作はシェイクスピアの戯曲「ウィンザーの陽気な女房たち」で、演技の要素も重要な作品であることから、稽古に入る前に数日間の原語での歌、せりふの読み合わせを徹底し、歌と演技を密接に絡ませ、密度の高さでこの作品の長所を描いていきました。



ウィンザーの陽気な女房役が演奏を大いに盛り上げた。初日の公演、左より脇阪法子(ナンネッタ)、山田知加(アリーチェ)、中島都子(クイックリー夫人)、阿部奈緒(メグ・ペイジ)

さらに「出演者全員が主役」とされるこの作品の持ち味を生かし、主役ファルスタッフを中心に各場面に緊張感を持たせ見せ場を紡ぎました。

園田の指揮は、テンポと歌の絶妙のコンビネーションを作り、この作品に不可欠なリズムの緩急をうまく使って全体を締め、ヴェルディが生涯を通じて獲得した充実の境地を表現しました。

一般の方から助演を公募しました

一応募のきっかけは

びわ湖ホールの仕事に興味があったのと、稽古の時にオペラを何回もいるんな場面で見られるという喜び、楽しみながらできたらなという思いから、応募させてもらいました。

一オペラの稽古を体験していかがでしたか

演出の田口さんからご指導いただき、第2幕の終わりに洗濯カゴに隠れているファルスタッフを川に放り込むシーン(右の写真)がオペラが一番のポイントだと思い、喜んでやりました。

通し稽古や場当たりなどを通して、演じながらこうしてオペラができていくのだなということがわかりました。

岩田純二さん(給仕役)



第2幕幕切れ、洗濯カゴに隠れていたファルスタッフが給仕によって洗濯物とともに川に投げ込まれる場面。この作品のハイライトの一つで、給仕役を一般公募の助演が演じた。(矢印が岩田さん)

公演はいかがでしたか



神戸山手女子中学校高等学校の高等学校音楽科のみなさん

大きなびわ湖ホールでみんなと生で聴けたことがうれしかったです

池田則彦先生(音楽科)

この時期に行くはずだったウィーンへの海外研修旅行がコロナ禍でなくなって、それに代わるものを探していたら、オペラ『ファルスタッフ』を見つけました。うちの学校の先生の何人かがびわ湖ホールと関わりがあったことや、今日来て生徒の中にも合唱団としてこのホールで歌ったことがあるので、時期的にも良いかなとこの公演に伺いました。

徳美歌さん(声楽科3年)

長いコロナ禍で、みんなで生の舞台を観る機会が少なくなって、オペラ歌手の男声や女声を生で聴く機会もほとんどありませんでした。こうして大きなびわ湖ホールで、みんなと生で聴けたことがすごくうれしかったです。

冒頭の演出家による説明から、オペラの物語に引き込まれるように舞台を作っていた方々の素晴らしさを感じました。

声楽を学んでいるので、将来は歌の仕事に就けたらと思っています。